

学位論文

ロールシャッハ・テストにおける  
適応的退行と創造性

—— 概要書 ——

東北大学大学院教育学研究科

吉村 聡



# 目 次

## 第 1 部 理論的研究

第1章	一次過程の定義とその変遷	1
第2章	ロールシャッハ・テストによる一次過程／適応的退行の測定と 一次過程表象尺度	2
第3章	試論 ——ロールシャッハ・テスト場面における「遊び」と一次過程表象察——	4
第4章	第 2 部への問題提起	6

## 第 2 部 実験研究

第5章	ロールシャッハ・テスト構造変数と一次過程表象尺度 (研究 1)	8
第6章	パーソナリティ, メンタルヘルスと一次過程表象尺度 (研究 2)	10
第7章	対人関係の場としてのロールシャッハ・テストと一次過程表象尺度 (研究 3)	11
第8章	一次過程思考と創造性 ——ロールシャッハ・テストにおける一次過程表象尺度と 言語連想課題における連想の獨創性について—— (研究 4)	12
第9章	感情体験と一次過程表象尺度 (研究 5)	13
第10章	第 2 部の諸研究から派生する問題点と課題	14

## 第 3 部 事例研究

第11章	全事例における共通点 (研究 6 および 7)	16
第12章	遊びと巻きこまれの観点からみた相違点 (研究 6 および 7)	18
結 語		21
引用文献		22

# 第1部 理論的研究

## 第1章 一次過程の定義とその変遷 (本編<sup>1</sup> 第1章・第2章)

心的過程を一次過程(Primary Process)と二次過程(Secondary Process)に分けて考える試みは、Sigmund Freudによって始まった。Rapaport (1951) は、一次過程を記憶の欲動による構成体として考え、この一次過程によって、何らかの欲動との関連づけの中で全ての対象、イメージ、経験が構成されると考えた。そして、一次過程は「内容としての一次過程(Content Primary Process)」と「形式としての一次過程(Formal Primary Process)」から成り立つこと、これらが「象徴化」「置き換え」「圧縮」「連合弛緩や自閉的論理」などに見られることを論じた。そして Rapaport は、二次過程的思考を欲動や感情によって方向づけられたものというよりは、記憶の概念的な構成体であると考えた。つまり、二次過程は欲動とは基本的に無関係なものとして考えられ、Freud の言うような現実原則に従うものとして理解されている。さらに、Holt (1967) は、一次過程と二次過程が順次発達するのではなく、その両者が同時に発達を遂げること、したがって二次過程的思考ばかりではなく、一次過程思考も生誕時から備わっているのではなく、それ自体の発達を遂げると主張している。Noy (1969) はこの Holt の考え方を受け、一次過程は「誕生時に与えられるものではなく、未成熟な乳児が、知覚した世界や与えられた環境内で自らの欲求を統合する試みから徐々に発達してくるもの(Noy, 1969, p.161)」であり、「自我の統合的・同化的試みの一部として、統合的な機能を果たしている(Noy, 1969, p.161)」と考えた。当初 Freud が定義した一次過程は「快感原則に即した自己完結の思考様式」であった。そうした考え方の根幹部分に変化はないものの、後の理論家の手によって、一次過程が「それ自身発達を遂げる統合的な思考」であり、「人間として発達していく上で不可欠なもの」であることが明るみにだされている。

Freud はその理論構築の初期段階から、一次過程の一つの重要な機能としての「創造的能力」に着目していた。そして Freud にとって、芸術家の創造的能力は、前意識と無意識との境界の弱さ、もしくは抑圧の脆さによる一次過程の自由な活用が重要な影響を及ぼしていると考えられていた。Kris (1952) は、Freud が「抑圧の脆さ」と表現した現象をマイナスの作用として理解するのではなく、自我の持つ一つの特徴として理解し、芸術的能力との関係を考察した。Kris (1952)はこれを“regression in the service of the ego”と呼び、特に芸術家の自我機能には、無意識の心的過程に退行するだけの自律性が備わっていると指摘している。Kubie (1958) や、Arieti (1976) なども、基本的に Kris (1952) の主張を支持しており、一次過程と二次過程の融合が創造性にとって重要な役割を果たしていることを主張している。

<sup>1</sup> 以下、「本編」は学位論文の本編をさすものとする。

## 第2章 ロールシャッハ・テストによる一次過程の測定と一次過程表象尺度 (本編 第3章)

ロールシャッハ・テストを用いた一次過程思考の把握に最も大きな貢献をしたのは、精神分析学者の Robert R. Holt である。Holt は、1954 年に "Neutralization Index" と呼ばれる、ロールシャッハ・テストによる一次過程思考の把握を目指した尺度を発表した。その後も度重なる尺度の改変を続け、1977 年に一次過程表象尺度 (Scores for Primary process manifestation on the Rorschach; PRIPRO) と称されるスコアリングシステムを発表した (概要は Table 1. を参照のこと)。

このスコアリングシステムには、二つの尺度得点が考案されている。その一つが、ロールシャッハ・テストの全反応数に対する一次過程思考の表れが認められた反応数の割合を算出する「一次過程思考尺度 (Primary Process Thinking Score; PPR%)」であり、もう一つが、自我の統制の加えられた一次過程思考、すなわち適応的退行の割合を測定する「適

Table 1.  
一次過程的表象尺度 (Holt, 1977) の概要

- 
1. 反応内容
    - (1) 性愛／口唇的反応内容 (Libidinal Content)  
口唇的受容, 口唇的攻撃, 肛門, 性, 露出・覗淫, 同性愛, その他
    - (2) 攻撃的反応内容 (Aggressive Content)  
攻撃, 攻撃の被害, 攻撃の結果
  2. 反応様式
    - (1) 圧縮 (Condensation)  
混交, 感染, 相互浸透, 混合, 恣意的結合, 不適切な色彩
    - (2) 置き換え (Displacement)  
連鎖連想, 音韻連想, 語呂合わせ, 比喩, 時間の置き換え
    - (3) 象徴化 (Symbolization)  
色彩・濃淡, イメージ, 空間
    - (4) 矛盾 (Contradiction)  
情緒, 論理, 現実性
    - (5) 言語表現 (Verbalization)  
支離滅裂, 圧縮, 奇矯な言語表現, 特異な言語表現, 言い間違い
    - (6) その他 (Miscellaneous Distortions of Thought and Perception)  
自閉的論理, 記憶弛緩, 無関係な思考の侵入, 他
  3. 統制と防衛
    - (1) 距離 (Remoteness)  
縮小, 民族, 動物, 植物, 非生物, 描写, 地理, 距離, 物語, 宗教, 空想, 隠喩, 假定
    - (2) コンテキスト (Context)  
文化, 美的, 知的, ユーモア
    - (3) 遅延方略 (Postponing Strategy)  
遅延, ブロッキング
    - (4) その他の防衛 (Miscellaneous Defense)  
反映, 婉曲, 粗野な言語表現, 適応的修正, 合理づけ, 否定, 最小化, 不安対抗, 自己非難, 否認・拒否, 曖昧, 投影, 強迫的防衛, 分離, 回避, 不能
    - (5) オーバートネス (Overtness)  
行動, 言語, 体験, 潜在
-

応的退行尺度(Adaptive Regression Score; ARS)」である。PPR%は、主に「一次過程的  
 反応内容(content variables)」と「一次過程的反應様式(formal variables)」の二軸から把握さ  
 れ、さらに全ての一次過程表象反応に対して、そこに含まれる一次過程の程度に応じて  
 Level-1 (より重篤度が高い) と Level-2 とに分けてスコアリングをする。一次過程的反應  
 内容は「性愛的内容(libidinal content)」と「攻撃的内容(aggresive content)」によって、  
 一次過程的反應様式は「圧縮(condensation)」、「置き換え(displacement)」、「象徴化  
 (symbolization)」を中心に把握する。また、ARS は、一次過程思考のリストを中心に、1  
 点から 6 点までの 6 段階で評定を行う「防衛要求スコア(defense demand score; DD)」と、  
 Mayman の形態水準評定に拠って-3 点から+2 点までの 0.5 点間隔による評定を行う「防衛  
 効率性スコア(defense effectiveness score; DE)」との積によって算出される。ARS の算出  
 方法には二種類が知られているが、以下の (数式 1) によるものが多い。

$$ARS = \frac{\sum DD \times DE}{\# PPR} \quad (\text{数式 1})$$

注) #PPR : 一次過程思考に該当した反応数

Holt の尺度は、ロールシャッハ・テストを用いて一次過程思考を測定することだけにそ  
 の意義があったのではない。より重要なのは、「自我の統制と防衛の測定を取り扱う(Kleiger,  
 1999, p.61)」点にあると言われ、「逸脱言語表現そのものに限らず、一次過程が統制され、  
 適応的な目的のために利用されている程度を査定していること、そしてそのことによって、  
 PRIPRO が認知と情緒の様々な能力に対する関係を示していること(Kleiger, 1999, p.79)」  
 があげられている。Holt の尺度によって測定される適応的退行が創造的能力の指標となり  
 うるか否かを検討した研究が、この 30 年ほどの間に数多く発表されたのは、この Kleiger  
 の指摘にあるような尺度の特質に拠るところが大きい。先行研究の多くから、成人におけ  
 る ARS が、問題解決能力(Blatt, Allison, and Feirstein, 1969)、遠隔連合(Murray & Russ,  
 1981)、芸術家の表現能力や経験年数(Dudek, 1984; Dudek & Chamberland-Bouhadana,  
 1982)などと正の相関関係にあることを確認している。さらに、同様の傾向は児童を対象に  
 した研究でも確認されている (Russ,1982,1988; Russ & Grossman-McKee, 1990 など)。  
 多くの研究が積み重ねられる中で、この尺度が信頼性と妥当性を備えたものであるとの見  
 解は一致しているようである(Holt, 1977; Kleiger, 1999; Lerner & Lewandowski, 1975)。

### 第3章 試論

#### ——ロールシャッハ・テスト場面における「遊び」と一次過程表象—— (本編 第4章)

前章では、HoltのPRIPROに関する研究に焦点をあて、ロールシャッハ・テスト上に表現される一次過程思考や適応的退行が、創造的な能力を反映するものであることを確認した。しかし、ではなぜこのPRIPROが創造的能力と関係するのか、その要因についてまで踏み込んだ考察は、意外に少ない。これに対して、本章では、ロールシャッハ・テストの反応過程に特徴的な「遊び」に着目し、この「遊び」をロールシャッハ・テストの反応過程を視野に入れながら考察している。

ロールシャッハ・テストは、図版に描かれているものが「インクの染み」であることを了解しながらも、それを他のものに見立てて反応することを要求する課題である。したがって、それは被検者に「誤認知(misperception)」を要求するものであり(Exner, 1993; Weiner, 1986)、「知覚の『かのような』側面への自覚(Smith, 1994)」の上に立脚している。つまり、ここで要求されている課題は「『ふり遊び』のゲームを遊ぶこと (Murray, 1951, p.xi)」である。

筆者は、このロールシャッハ・テスト場面が要求する「遊び課題」としての特質が、適応的退行に大きく関わっていると考えている。ロールシャッハ・テストに内在する「見立て」としての遊びの作業を基盤として、適応的退行は、そこに自己の欲動や内的世界を投射する過程でもある。そして、投射される素材としての一次過程は、欲動という、内的自己に著しく近い性質のものである。通常の対人場面では見せることのない一次過程を、多くの場合において初対面同様のテストを前にして伝えるという作業は、それだけ被検者が総体としてのテスト場面に「巻きこまれて」いることを意味している。ロールシャッハ・テストで十分適応的に退行している者は、この「巻きこまれ」の状況を自我の統制下におき、かつ楽しんでいられる者であると考えられる。したがって、逆に、ロールシャッハ・テスト状況で適応的に退行することのできない者は、テスト場面で生起しやすい不安を十分受け止めた上で、これを遊びという適応性に変えることのできない者であるともいえる。

そして、この適応的退行を支える「遊びの場」としての「潜在空間 (Winnicott, 1971)」は、認知科学の用語を用いて説明した場合に、注意の焦点づけが広範囲に渡り、様々なスキーマや感情価が並列的に活性化されている状態として理解することができる。ロールシャッハ・テストは、狭義の知覚課題ではなく、それゆえに適応的退行は知覚、記憶、感情、判断などの様々な認知機能が輻輳する複雑な心理機制に依拠する心的過程であり、こうした複数の要因が極めて短時間に、あるいは同時並行的に生起する瞬間でもある。そしてこのネットワーク理論の考え方を援用することで、適応的退行と創造性とを繋ぐ鍵を得ることができる。すなわち、ロールシャッハ・テスト場面で適応的退行を体験することができる者は、ある特定の刺激を視覚情報として入力した場合に、その入力情報に結びついている認知ノードが感情、記憶、判断など多岐にわたっているがゆえに、他の多くの人には思いつかないような独創性を発揮することができるのである。

さらに、この心的ネットワークの考え方を援用することにより、視覚情報としての図版

刺激を前にして、ロールシャッハ・テスト場面で適応的に退行することの可能な者が、多くのそうでない者以上に様々な感情や記憶想起を体験している可能性が強く示唆される。筆者は、ロールシャッハ・テスト場面に内在する検査の特質としての「遊び」に着目しているが、この「遊び」から沸き起こる快感情についても、ネットワークの考え方で理解することができる。そして、適応的退行が快感情の活性化をもたらすという事実は、適応的退行が創造的能力を意味する可能性の高いことを考えたときに、重要な意味をもっている。創造的な能力には肯定的な気分（あるいはその強弱）が重要な影響因になっていることが、近年確証されていることも、重要な傍証になるであろう。

## 第4章 第2部への問題提起 (本編 第5章)

本論文では、一次過程に関する先行研究、及び筆者による試論から、以下の問題点を実験的に検討を行うものとした。

### (1) 一次過程表象尺度の基礎的な意味合いについて

第5章および第6章(本編 第6章および第7章)への問題提起

本邦では、PRIPROの基礎研究は未だ不十分な段階にある。そのため、まずはこの尺度が測定している心理的な特性や認知機能全般についての検討が不可欠である。本論文ではその第一段階として、PRIPROによって測定される心理特性の意味について、ロールシャッハ構造変数との比較の中から分析を行う。ロールシャッハ・テスト内の変数同士の比較を経た後に、ロールシャッハ以外の尺度によって測定された心理特性の特徴やメンタルヘルスとの関係を検証する。特に、一次過程思考尺度はメンタルヘルスの観点からみた場合に不適応的な精神状態を測定しているのか、そしてその否定的な精神状態を、適応的退行によって把握される心理状態は緩和することに成功しているのかどうかについて、重点を置いた考察を試みる。加えて若干の事例検討も行うことで、尺度の持つ適応性を、臨床心理学的観点から検討することを目的とする。

### (2) 対人関係の場としてのロールシャッハ・テストとPRIPRO

第7章(本編 第2部第8章)への問題提起

ロールシャッハ・テストは検査者と被検者の二者関係を基盤にした検査である。この検査場面の中で、被検者は必ずしも全ての知覚体験を検査者に伝えるわけではない。特に言語化しようとしている反応が、一次過程思考という「社会的に禁忌とされ(Russ, 1988a)」「社交場面での発言は問題視される(Holt, 1977)」想念を含む場合、被検者は検査者の存在を意識的/無意識的に感じざるを得ないだろう。本論文では、ロールシャッハ・テストを一つの対人場面として捉え、検査者と被検者の関係性が、被検者のロールシャッハ・プロトコルにおける一次過程の表象にどのような影響を及ぼしうるのかについて検討する。今回は特に、社会的望ましさととの関係から、検査者と被検者の性別の組み合わせと、検査者と被検者の検査以前の関係性(面識があったか否か)に着目して検討を行う。

### (3) 心的ネットワークの場としてのPRIPROと拡散的思考

第8章および第9章(本編 第9章および第10章)への問題提起

本稿では、本編第4章で検証したように、適応的退行が並列分散処理的な情報の処理システムに依拠しているという仮定に基づき、この拡散的思考と、そこから派生する連想の独創性について着目する。さらに、心的ネットワークの密な形成と自己にひきつけた体験の想起という現象を考えると、被検者は単に知覚を想起しているばかりではなく、ある種の感情を体験しているという事実から、この感情の問題についての考察も不可欠であることは自明である。適応的退行を「遊び」体験として考察する本論文の立場では、なお一層のことであるといわざるを得ない。おりしも、創造性研究では感情と認知のあり方に関



するトピックが様々な学術雑誌に多数報告されており、創造性を論じる際に感情の問題を切り離して考えることが不可能であることが、徐々に明らかになってきている。本論文では、「遊びと並列情報処理」のあり方のあらわれの一つとしての感情体験と連想の独創性に着目して、Holt の PRIPRO が示すとされる創造性についての検討を、より一層深めることを目指している。

## 第2部 実験的研究

第1部で、筆者は、先行研究の関心が Holt (1977) による一次過程表象尺度 (PRIPRO) と創造的能力との関連についての事実確認に終始しがちであることを指摘した。しかし、適応的退行には「適応的」であるがゆえの特徴があるはずであり、「創造性」は適応メカニズムの一つの現われに過ぎないと考えられることから、筆者はパーソナリティやメンタルヘルスの観点による「適応性」の考察も必須であると論じた。その上で、本論文では「一次過程思考」と「創造性」の問題について、常に「メンタルヘルス」の観点を加味した検証と考察を行っている。さらに第2部の実験的研究編では、「一次過程思考」「創造性」「メンタルヘルス」を繋ぐ心理機制のキーワードとして、被検者がロールシャッハ・テストというストレス価の高い場面で「遊んでいられる能力」を提起し、それをもとにした心的プロセスとしての「並列的な情報処理システム」を考察した。本論文では、これらの心理機制を前提にした場合に想定される心理学的な特性の中から、言語連想と感情の問題に焦点をあてた検討も行っている。以下、各章の概略を順に記すものとする。

### 第5章 ロールシャッハ・テスト構造変数と一次過程表象尺度

(研究1：本編 第6章)

本章では、Holt の PRIPRO についての予備的研究を報告している。ここでは、PRIPRO の測定している心理特性について、ロールシャッハ・テストの構造変数との相関関係から検討を行った。男女各 50 名ずつの非患者成人 (学生) から得られたデータから、Holt の一次過程思考尺度 (PPR%) が、WSum6 や MOR、SumC'、m などの変数と正の相関関係にあることが明らかになり (順に  $\rho = .479$ 、 $\rho = .267$ 、 $\rho = .331$ 、 $\rho = .479$ ; 全て Spearman の順位相関係数)、これらの結果から、思考の歪みや否定的な感情の内在化が生じやすい傾向、状況ストレスによる影響を受けやすい傾向のある可能性が指摘された。これに対して適応的退行尺度 (ARS) は、WSum6 との間に PPR% のときよりも弱められた相関関係を有していること ( $\rho = .479 \rightarrow \rho = .228$ )、M や SumH との有意な正の相関関係にあること (順に  $\rho = .266$ 、 $\rho = .292$ ) が確認された。ARS が有意な相関を示したロールシャッハ構造変数はそれほど多くはなかったのだが、全体として、思考の歪みなどを表す変数が PPR% に対して示していた相関係数を弱めつつも保持しており、同時に ARS は、M や EA に代表されるあ利用可能な内的資質の存在を証左する変数とも分散を共有していた。つまり、PPR% が表す心理状態はメンタルヘルスの側面から見た場合に否定的な様相を呈しやすいものと推察されるが、ARS によって提示されるそれは「強さ」と「弱さ」を混合した状態にあると考えられ、メンタルヘルスの観点からは微妙なバランス関係にあることが示唆された。また、DQ+、Blends/R、Zd などの心理的複雑さと情報処理能力の指標との有意な正の相関 (順に

$\rho=.237$ 、 $\rho=.270$ 、 $\rho=.207$ ) から、ARS が創造的能力との関連することの傍証も得られている。

この研究で PRIPRO の両変数に共通して顕著であったのは性差であった。すでに先行研究によって性差の存在は強調されているが、本研究においても、多くの変数との有意な相関を認めたのは男性被検者であり、女性の場合は、どの変数に対してもあまり顕著な傾向を示さなかった。しかし、本稿では男性と女性とでは一次過程思考を表出することに伴う社会的禁忌や心理的な圧迫が異なるために、被検者が検査者の存在を意識して社会的望ましさの要因が介在するという可能性に着目している。試みに PPR%の高い女性のみを分析対象にして、ARS とロールシャッハ構造分析との相関係数を算出してみると、高い PPR% を報告した女性における ARS の持つ意味が、男性被検者における ARS の意味に類似していることが確認された。

## 第6章 パーソナリティ、メンタルヘルスと一次過程表象尺度

(研究2：本編 第7章)

本章では、PRIPRO によって測定される被検者のメンタルヘルスの特徴について検討した。前章では、同じロールシャッハ・テストから得られた尺度との間での比較を行ったが、ここでは、質問紙による尺度との相関研究を行っている。本章では、抑うつ状態の指標である日本版 BDI と、神経症傾向と社会的向性の二軸から性格の類型を行う日本版 MPI の二種類を用いて、50名の学生を対象に、ロールシャッハ・テストにおける PRIPRO との相関研究を報告している。結果、PPR%は MPI の N 尺度と中程度の正の相関にあること ( $\rho = .494$ ) が明らかになり、抑うつ尺度との間には 10%水準での正の相関 ( $\rho = .277$ ) が確認された。そしてこの傾向は、ロールシャッハ・テストに表出される欲動がより直接的である Level 1 の反応についてのみ取り上げて計算した場合にさらに顕著であり、特に Level 1% の一次過程表象反応と BDI 尺度との相関は、有意水準にまで上昇すること ( $\rho = .325$ ) が明らかになった。これに対して、一次過程思考の反応数を統制した  $\Sigma(DD \times DE)$  の値 (先行研究で一般に"ARS"として扱われている値) は、PPR%が把持していた神経症尺度との相関を緩和し ( $\rho = .494 \rightarrow \rho = -.132$ )、抑うつ尺度との相関値にいたっては、正の相関であった両尺度の関係が逆相関に相関傾向が全く逆転するまでになっていた ( $\rho = .277 \rightarrow \rho = -.290$ )。以上の結果に加え、MPI における神経症尺度がロールシャッハの現実吟味指標とは負の相関関係にあることも確認されたこともあわせて考察すると、ロールシャッハ・テスト上で一次過程表象に偏りがちな被検者 (PPR%の値の高い被検者) の現実への対処様式には、神経症傾向や抑うつ傾向に代表されるような、問題視されがちなメンタルヘルスの様態が多いこと、適応的な退行が可能な被検者 (ARS の得点が高い者) は、必ずしも良好なメンタルヘルスと関係をもっていたり、逆に否定的な所見との顕著な関係を持っているというわけではないこと、むしろそういったメンタルヘルスの観点からよりも、社会的外向性といった社会的な疎通性を視野に入れた適応性と密接に関連していることが論じられた。

本章では、以上の実験研究に基づく知見に加えて、事例による確認も報告している。事例検討では、ARS の得点が他の者に比べて比較的高い男子学生二事例を取り上げた。この二事例は、ARS 得点の高さでは共通していたが、MPI と BDI で測定される性格傾向はむしろ正反対で、一方の事例は顕著な神経症的傾向をもち、他方は外向的性格が明らかな事例であった。この二事例について、ロールシャッハ・テストにおける形式分析 (片口式) と CardIXでの反応継起に注目した分析を行った。結果、神経症的傾向の強い事例では、ロールシャッハ全体としての ARS は高得点であったのにも関わらず、ときに自我の統制に崩れが生じることもあること、そしてその際に対人緊張感が強くにじみ出ていることなどが確認された。ロールシャッハ・テスト全体で適応的に退行ができていると考えられる者であっても、カードごとに検討してみると、場面によって自我の崩れが生じていることもあり、ARS の得点が「常に良好な精神状態」を意味するわけではないことが、改めて確認された。

## 第7章 対人関係の場としてのロールシャッハ・テストと一次過程表象尺度 (研究3：本編 第8章)

第1部の理論的研究編で、PRIPROの表出に影響を及ぼす可能性が高いと論じられた社会的望ましさに注目し、検査者と被検者の関係性が被検者のロールシャッハ・プロトコルにおけるPRIPROに与える影響について検証した。今回主な検討対象にした「検査者／被検者」の組み合わせ（関係性）は、両者の性別の組み合わせと、検査前に両者が既知の間柄にあったのか、あるいは初対面同士であったのかという観点である。まず、検査者と被検者の性別の組み合わせによって、被検者のロールシャッハ・テストにおけるPRIPROの各尺度の値を $U$ 検定によって比較したが、この観点からは明らかな傾向を見出すことはできなかった。一方で、検査者と被検者が「既知の間柄であるか否か」という点から比較した場合、検査者と被検者との間に面識があった群の方が初対面の群に比べてPPR%の値が有意に高くなることが確認され( $Z=-2.248$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )、一次過程思考が検査者と被検者の組み合わせという対人関係による影響を受けやすいことが明らかにされた。しかし、同様の関係をARSについてみると、両群に有意な差は認められなかった( $Z=-1.345$ ,  $df=1$ ,  $n.s.$ )。また、PPR%の差に関連して具体的な反応内容に注目してみると、攻撃的な反応内容に対して検査者／被検者の関係性が直接もたらす影響は明らかにならなかったのに対して( $Z=-1.372$ ,  $df=1$ ,  $n.s.$ )、性愛的な反応内容は、検査者と被検者との間に面識がある場合の方が有意に高い値をとることが明らかになった( $Z=-2.234$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ )。この結果は、ロールシャッハ・テストが性愛的な観念を喚起しやすい傾向（あるいは依存退行願望を賦活しやすい傾向）を意味し、そうした心理的な活動の意識化（言語化）が、被検者の検査者との関係如何によって容易に操作されやすいことを意味していると考えられた。これに対して、攻撃的な観念を表象する反応内容には、検査者と被検者の組み合わせを変えても変化が見られなかった。このことから、「させられ体験」として認識されやすいといわれるロールシャッハ・テストではあるが、検査を「受けさせられる」ことや検査場面によって「半ば強制的に退行を余儀なくされる」ことなどから発すると思われる被検者の心理的な怒りの表出と投射は、検査者と被検者とが既知の間柄であっても初対面であったとしても、その程度を如実に変化させることはあまりないものと予想された。

## 第8章 一次過程思考と創造性 ——ロールシャッハ・テストにおける一次過程表象尺度と言語連想課題における連想の独創性について——

(研究4：本編 第9章)

この章では、一次過程思考／適応的退行が創造性の測定尺度となりうるという先行研究からの仮説を検証した。今回は、創造性を証左する測定尺度として、言語連想検査を取り上げている。数ある創造性検査の中から言語連想検査の採択した背景には、ロールシャッハ・テストにおける一次過程思考が創造的能力を意味すると考えた場合、並列的な情報処理能力が重要な役割を果たす可能性が大きいと考えられることがある（第1部理論的研究編を参照）。言語連想検査は従来から創造性の一指標として利用されることも多く、かつその反応過程に並列的な情報処理を仮定することができると考えられることから、この検査を用いることで連想の独創性と一次過程思考との関係を検討することが可能である。さらに、言語連想検査に望むに際しての動機づけを統制し、「独創的であろう」とする心理的な構えの要因についてもあわせて考察することで、独創的な「能力」と独創的であろうとする「動機づけ」とを分割して考える視点による考察を試みた。以上の検討を、60名の学生（男性25名、女性35名）を対象にロールシャッハ・テストと個別の言語連想検査の実施によって行った。

結果、男女いずれにおいても、「独創的な連想語」を求めた言語連想検査の条件下において、ロールシャッハ・テストにおける一次過程表象反応の反応数(PPR%)と独創的な連想語の回答数との間に有意な正の相関関係は認められなかった（男女順に $\rho=.201$ , n.s.、 $\rho=.235$ , n.s.）。しかし、ロールシャッハ・テストにおける適応的退行尺度の値(ARS)についてみると、独創的な連想語を求められた言語連想検査において、ロールシャッハ・テスト上でARSの高い男性は、求められた独創的な連想語をより多く報告していた（ $\rho=.400$ ,  $p<.05$ ）。この結果は、男性のARSが創造性の指標になりうるというこれまでの仮説を支持するものになっている。この先行研究の知見に加えて、本研究結果からは、ARS高群が言語連想検査において提示される刺激語が性愛的な性質をもつ場合に顕著な独創性を発揮する傾向にあることも確認された（ $\rho=.499$ ,  $p<.05$ ）。一方、被検者を女性に限定した場合には、言語連想検査において「できるだけ一般的な連想語」を求めた場合、PPR%高群はその教示とは逆の連想語を多く報告する傾向にあった（ $\rho=-.385$ ,  $p<.01$ ）。すなわち、女性のPPR%高群が一般的であると思って報告した連想語の多くは、統計的に定義された一般性からは逸脱していたわけである。これらの結果から、ともに創造的能力の指標であるといわれている男性のARSと女性のPPR%でありながら、その性質は異なるものであることが主張されている。本稿ではこの相違を考察するにあたって、言語連想検査での最終的な反応以外の「潜在的な反応」と、その潜在反応を選択する「判断過程」とを分けて考える新たな視点に基づく解釈を試みた。結果、男性のARSには、特に性愛的な刺激を与えられた場合にそこから生じた連想そのもの、つまり潜在反応プールの段階に独創性が認められる可能性が高いことが論じられた。一方、女性のPPR%が測定しているものには、潜在反応の独創性というよりも、潜在反応プールから最終的に反応を選び出す際の「一般／独創」の基準枠の独自性が大きく作用しているのではないかと論じられた。

## 第9章 感情体験と一次過程表象尺度 (研究5:本編 第10章)

適応的退行が前提とする心的過程では、ロールシャッハ・テスト場面で記憶内の知覚像から図版刺激と類似のものを選び取るという狭義の知覚作業のみならず、様々な感情が随伴したり、自伝的記憶が想起されるといった現象が生じているという仮説をもとに、本章では、一次過程思考/適応的退行によって測定される心理特性と、日常体験する感情特性のあり方についての関係を追究した。検討の対象とした感情の特徴としては、創造性に関係が深いと指摘されている「中程度の強さの感情体験」と「感情刺激への反応性」、および「感情刺激に直面した時のコントロール」を取り上げた。「感情刺激への反応性」と「コントロール」の測定尺度としては、ロールシャッハ・テストにおける感情クラスターの指標から Afr, WSumC, FC:CF+C を採用した。また、「感情体験の強度」を測定尺度としては、予備研究として Larsen, Diener, and Emmons (1986) の感情体験強度尺度(AIM)の日本語版を作成し、これを用いた。

結果、男性のARSと女性のPPR%はAIMとの有意な正の相関関係にあることが明らかになり(順に $\rho=.439$ 、 $\rho=.372$ ;ともに $p<.01$ )、ロールシャッハ・テストにおいて一次過程表象を多く言語化する女性と、一次過程表象を言語化しながらその反応の形態水準を良好に維持することの多い男性が、日常場面で比較的強い感情を体験しがちであることが示された。また、感情刺激への反応性やコントロールの指標については、PPR%の低い女性に情緒刺激への反応性の乏しい者(WSumCの値が2.5未満の者)が多く含まれており、ロールシャッハ・テストにおいて自らの欲動を反応中に投影することの少ない女性は、感情刺激に対しても閉鎖的になってしまう可能性が論じられた。また、PPR%の高い男性とARSの低い女性には感情刺激に直面した場合のコントロールに失敗する者(CF+Cの値がFCを上回る者)が多く含まれる傾向にあることが示された。以上の結果から、創造性指標としての男性のARSと女性のPPR%は、比較的強い感情を体験する傾向にあることが示される一方で、実際のメンタルヘルスとは異なる機能を有していることが論じられた。その一方で、創造的能力とは異なる機能を反映している男性のPPR%と女性のARSは、それぞれの指標が内在しているコントロールの意味あいが増え損なわれることなく保持されており、PPR%の高さやARSの低さが、感情体験においても統制の不良をもたらす可能性の高いことが考察された。

## 第10章 第2部の諸研究から派生する問題点と課題 (本編 第11章)

第2部の諸実験から、ロールシャッハ・テストにおける一次過程思考と適応的退行（その中でも特に男性における適応的退行）は、性格傾向の偏り（あるいは精神病理学からみた若干の逸脱）を抱えながら、同時に現実場面への適応を維持している姿を反映していると考えられるであろう。そして、その適応への営みの一つの現れとして創造的所作があげられるものと推察することができる。特にロールシャッハ・テストにおける適応的退行は、創造的能力の指標として有用であることが改めて確認されると同時に、この指標で高得点をあげる者が、ロールシャッハ・テスト上で極めて広範な認知機能を用いていることが示されている。本論文から明らかになったことは、こうした被検者にとって、ロールシャッハ・テストは単なる「知覚の照合作業」ではないということである。彼らにとって、この検査は広範で独創的な連想を必要とする心理過程であり、また、感情体験との統合の作業でもある。さらに、この検査は被検者が唯一人で図版に向かって行われるような孤立したものではなく、検査者の存在や検査者との関係性によっても影響を受けるような、「対人関係」を基盤とした作業でもある。本論文では、従来から「創造性指標」としての存在の確認にとどまることの多かった Holt の PRIPRO について、本論文ではロールシャッハ・テストの反応過程やメンタルヘルスの観点を視野に入れた総合的な検討を行った点に大きな特徴がある。

しかし、「男性における適応的退行尺度得点は創造性の指標になる」という知見が揺るぎのないものであるとしても、実際の被検者一人一人でのあり様は様々である。本稿における実験で主に依拠した相関研究は、あくまでも全体的な傾向を把握するに過ぎない。無論、ある種の「心理学的法則」を実証することに科学としての心理学の意義があり、「できるだけ単純明快な法則」で「可能な限り広範囲の現象」を語ることは大きな魅力である。しかし、同時にまた、全体傾向はあくまでも全体傾向であることも事実である。筆者は、実験的検討によって得られた全体的傾向をさらに個々の事例によって確認してこそ、その研究はまとまりを得るのだと考えている。

特に、本稿が取り扱う「一次過程思考」「創造性」などの概念は、包括的で漠然とした定義とならざるを得ない。どの尺度についても同じことが言えるのであろうが、PRIPRO の PPR%で同じ得点になったからといって、一次過程思考の特徴やその統制の可否のありようは、個々の事例によって異なるだろう。10枚のロールシャッハ図版のうち、どのカードで欲動に彩られた思考が露呈したのか、どのカードでその欲動を適切に防衛できたのか（あるいはできなかったのか）によって、当然のことながら被検者のパーソナリティ像は大きく異なる。また、「若干の適応上の問題」といっても、どのような性格上・メンタルヘルス上の偏りを抱え、それをどのように解決しているのかなどの個別性の高い問題について知ることが、第2部で報告したような研究形態からでは限界がある。また、被検者がすべて一般学生（非患者成人）であったことも問題点の一つである。一般学生を対象にして得られた知見を、実際に芸術活動に携わっている者に適用できるのかについて、第2部の考察から述べることはできない。さらに、第7章（本編第8章）で得られた知見は、自ら精神的な問題を自覚してロールシャッハ・テストを受検する群と、研究の協力者として、ある



いは検査に興味を持つ者としてロールシャッハ・テストを体験する者とは、検査に望む際の動機づけは大きく変化することを提起している。この結果は、尺度の得点を考察する時に検査状況を個別に検討する必要性を強く主張するものである。以上の問題点を考案するためにも、事例に基づく考察は不可欠である。

特に、本論文は「一次過程思考」「創造性」「メンタルヘルス」の三変数の関係を多面的に検討していることから、検討する事例には芸術活動に何らかの形で関与している者を取り上げる必要がある。さらに、芸術活動とメンタルヘルスとの関係を見るために、何らかの精神的問題を抱えている臨床群としての芸術家と、非患者の芸術家の比較も必須であろう。その中から、各事例が、どのような心理的問題を抱えているのかについて検討するとともに、HoltのPRIPROによって測定される創造性は、実際の創造活動をどの程度反映しているのかについても検討する。これによって、第2部で全体的な傾向としてしか知りえなかった知見に、「生きた情報」として肉づけすることを目指している。

さらに、事例を詳細に検討する際に、HoltのPRIPROがロールシャッハ・テストの一連の解釈においてどのような位置を占めるのかについてもあわせて検討する必要がある。本稿の大部分で記号化や実施方法として依拠している包括的システムは、構造変数による解釈を根幹に据え、反応の継起的な理解を積極的に推奨してはいない。しかし、Gaconoらはこの構造分析に精神分析的な解釈を加えることで、被検者像をより鮮明に理解することを可能にしている(Gacono & Meloy, 1994; Meloy, Acklin, Gacono, Murray, and Peterson, 1997)。本稿では、このGaconoらの立場に準じて、「構造分析」と「精神分析的継起分析」のそれぞれから得られる被検者に関する統合的な視点による解釈を行う。そしてそこにHoltのPRIPROが新たに加えることのできる情報は何か、PRIPROの有用性は何かを探るとともに、逆にPRIPROによっては把握し得ないパーソナリティ側面についての確認も行う。

## 第3部 事例研究

第3部では、第2部の実験研究によって得られた知見を実際に芸術活動に携わっている事例を対象にして検討した。特に、HoltのPRIPROによって測定される性格傾向（または自我機能）が、ロールシャッハ・テストの解釈全体から得られる知見の中でどのような位置を占めうるのかについての考察も試みている。

事例検討に際しては、一次過程に対する身の置き方、すなわちロールシャッハ・テスト場面への「巻きこまれ」の程度とそこでの対応としての「遊び」の観点から特徴的であると考えられる事例を取り上げた。第12章は、ロールシャッハ・テストの提供するテスト場面に「巻きこまれて」はいるが、その事態を自我が楽しんでいる事例、すなわちロールシャッハ・テスト場面で遊びの成立している二事例（事例F、事例G）を取り上げた。第13章では、テストから受ける刺激に巻きこまれて自我の欲動が露呈することに対して距離をとったり、逆に過剰に巻きこまれることで自我の統制を崩している三人の事例（事例H、事例I、事例J）をとりあげた。合計5人の事例について、ロールシャッハ・テストの包括的システムによる構造分析と、Holt(1977)による一次過程表象尺度（PRIPRO）に基づく分析を行うことで、総合的な事例の理解を目指している。ここでは事例の詳細を割愛し、全事例の共通点と相違点のみを論じることで、HoltのPRIPROがロールシャッハ・テストにおいて果たしうる役割について総合的に論じる（本概要書においては、事例の詳細を論じた本編の第12章及び第13章は割愛している）。

### 第11章 全事例における共通点（本編 第14章）

それぞれの事例のロールシャッハ・プロトコルに共通するのは、一次過程の明らかな多用である。第2部第5章（本編第6章）では、一般大学生の一次過程思考スコア（PPR%）の平均値が、おおよそ15%から25%の間に分布していると報告されている。しかし、第3部の事例研究で取り上げた例を見ると、PPR%の値の最も低かった事例Hでも約65%の値を示し、事例Iにいたっては全てのロールシャッハ反応に何らかの一次過程の要素を認めることができた。また、退行の頻度のみならず、退行の深さを表すLevel 1についても、一般健常者と比較して非常に高い値になっている。この結果は、芸術活動に従事する者のロールシャッハ・テストには一次過程の要素が多く出現するという、これまでの知見を支持するものである。一次過程によって何らかの病理的傾向が示唆される場所ではあるが、各事例によって、その病理が健康な自我の存在によって干渉されたり和らげられている場合と、病理的な側面がそのまま露呈している場合とに分かれてはいるものの、一次過程思考スコアの高い者に何らかの性格上の弱さや偏りが存在することは確かであるように思われる。問題はその「偏り」の程度である。非患者の事例群は、この「偏り」が「偏り」と

してときに自我の統制を損なう局面を孕みながらも、概ね「その人らしさ」として人格の一部に吸収されている感があった。しかし、臨床群の場合は、単なる「偏り」であると考えするにはあまりにそれに対する防衛が頑なであったり、防衛が不全になって巻き込まれすぎてしまっている事態が多く見られた。「偏り」の存在事態は共通点であるといえても、その後が違っているのである。これについては、事例の相違点にも繋がる問題であるので、後でもう一度論じたい。

その他、構造分析における興味深い一致点としてあげられるのが、全ての事例に反射反応 (Fr+rF) が見られた点である。Exner (1991) は鏡映反応の時間的安定性が極めて高いことを指摘し、この種の反応が性格特性として一貫したものであることを強く主張している。そして反射反応によって表されるのは人格特徴としての自己愛性であり、誇張された自己のプライドを何度も保証されたり強化されることを望む傾向にあることを指摘している。そしてこの承認欲求が満たされるか否かによって、不適応性や病理の原因になりやすいかどうかが大きく左右されると Exner (1991) は考えている。本論文第3部で取り上げた事例の中には、鏡映反応の出現と同時に、MOR に示される顕著な否定的自己価値観の存在が示唆された者もあった。しかし、MOR の有無やこの特殊スコアがコードされた反応に対する対応の仕方は各事例によって様々であり、やはり全事例に共通する特徴としては、自己愛的な要素を考える必要があるのかもしれない。筆者は本編第2部第6章において、芸術的な能力との相関が謳われている適応的退行スコア(ARS)が包括的システムにおける自己愛性指標(EGI)と有意な正の相関にあることを報告したが、芸術活動に従事している者についてみた場合、この傾向は少なからず認められる可能性が高いといえそうである。いくなれば、芸術活動にはある種の「自己陶醉」と、事例Ⅾに典型的に認められたような「自己の感覚に対する自償」が不可欠であるのかもしれない。こうした自己感覚への信頼性から、自己の文脈で物事を捉えようとする傾向が生じ、これが主観的で独自の一次過程として発現する場合もあるのではないだろうか。

## 第12章 遊びと巻きこまれの観点から見た相違点 (本編 第14章)

構造分析や継起分析によって細かく事例を検討した場合に、各々の事例で問題点や自我の強さは異なっている。しかし、先に見たように、非患者であるといっても、その事例のロールシャッハ・テストに何らの問題点も見られないということはない。非患者の芸術群を見ると、例えば事例Fでは情緒統制や対人関係の弱さを抱えていること、事例Gでは依存葛藤の問題をもっているということをあげることができるだろう。しかし、臨床群と非臨床群の違いは、たとえ心理的な葛藤や崩れが一過的に見られたとしても、それが前面にたち、その心理的な問題のみに自我の対応が終始してしまうわけではないということにあるし、さらに葛藤に巻きこまれている自我に対して、どこかで冷静になって距離を保つことができているということである。臨床群の中でも、その病態の違いによって巻きこまれ方の程度は異なっていたが(外来通院の事例Iと入院加療を必要とした事例JでのPRIPROの相違を参照)、衝動に対する身のおき方や回復への試みと検査者に対する伝え方には、臨床群と非臨床群で歴然とした違いがある。

Holtの尺度によって把握が可能なこの自我の「弱さ」と「強さ」の微妙な結合状態は、「自我の弾力性」として考えることが可能なものである。これは、決して「堅固な」自我の力を意味しているのではない。事例Fの解釈の際に用いた比喩であるが、それは柳のように一旦はしなだれるが、それでももう一度元の位置に戻ることでできる力である。普段から揺れ動きやすく繊細であるのだが、その分、得ているものも多いようなパーソナリティである。おそらく芸術家はこの「柳」なのであろう。実際、芸術家としてのアイデンティティを確立し、すでに芸術活動によって生計をたてている事例Eと事例Fのロールシャッハ反応には、瞬間的あるいは経時的な大きな揺れ動きがある。例えば一般健常者のX+%は、平均して70%前後になることが知られているが(高橋・高橋・西尾, 1998)、この数値は、健常者の場合、プロトコルに含まれるほとんどの反応が一般性をもった反応、つまり平凡で無難な反応であることを意味している。そこでは、主観的な度合いの強い投映が加えられることはあまりなく、まして、一次過程が幅を利かせるようなことは稀であるのかもしれない。したがって、本論文で検討した芸術家の揺れ動きは、一般健常者には存在したとしてもごくわずかな、稀なものであるのだろう。低い形態水準という柳の大きな揺れ動きを経験しながら、その揺れ動きが(形態水準のような客観的な認知能力の範囲を越えた)自我の統制の範囲内におさめ、かつそれを自覚しながら楽しむことができる能力は、自我の機能として一つの大きな力である。そしてそれを直接に測定することが可能であるのが、HoltのPRIPROであるといえそうである。

本論文における事例を具体的に取り上げてみると、臨床群と非臨床群とで包括的システムの形態水準指標にそれほど大きな差異は生じていないことがわかる。例えば、五人の事例の中で最もARS得点の低かった事例Jでさえ、非患者の芸術家である事例Fに比べてわずかながら高いXA%を残しており、伝統的な構造分析の解釈概念からするとその位置関係は逆転している。現実場面での適応と照合した場合に真実に近い関係は、適応的退行スコア(ARS)に反映されている。ARSにおける両者の差は歴然としており、その値がマイナスにまで落ち込んでしまっている事例Jと比べ、事例Fは格段に高い値である。このように、

非患者群が比較的低い形態水準を基点としながらそれでも相応のARSにまで到達している背景には、各事例が様々な防衛活動を展開していること、たとえ認知が一過的に崩れたとしても、そうした一種の逆境を退行状態として楽しむ余裕を忘れないでいるという点が大きい。反応の説明の仕方や検査者への伝え方の点で、臨床群と非患者群とでは同じように形態水準の低い場合があったとしても、その後の自我の対応の仕方には決定的な違いが生じている。

そしてこの「巻きこまれ体験への自覚」が、その事例が固有にもつ心理的な脆さを和らげる働きをしていると考えられる。特に事例 F は、構造分析では自殺指標を始めとしていくつかの問題となる重要な指標も存在しており、ともすると重篤な病態の臨床群との鑑別が困難である。しかし、PRIPRO や継起分析からみた本事例の自我の対応には、病理的側面を越えた健康な自我の機制が目立っており、弱さと同時にそれをカバーしようとする知的・情緒的な営みが明らかになっている。これらの自我の機制の一つ一つがARSを高くしている。

本稿のわずかな事例から一般化することは困難であるが、一つの可能性として、社会的な成功をおさめている芸術家は、ロールシャッハ・テストにおいて「一次過程を顕著に反映させた」「低い形態水準のロールシャッハ反応」から出発し、そこから健康的な自我の営みをもって冷静さを回復するという経路を辿りがちであると考えられるのかもしれない。芸術家のロールシャッハ・テスト反応についてよく言われている仮説、すなわち、芸術家は「ロールシャッハ・テストで反応を言語化するにあたって一次過程を多用し、なおかつ反応の形態水準は損なわない」というのは、必ずしも真実であるとは限らないのではないだろうか。少なくとも本研究における芸術家群は、反応表象や論理の流れに一次過程を多用するところまでは同じであっても、それに伴って確かに反応の形態水準が低下しているのである。しかし、ここで臨床群と決定的に違うのは、その崩れが一過性のものであって、必ずと言ってよいほど立ち直るということ、あるいは形態水準は低下したままで図版への対応を終えているけれども、根本の現実吟味能力は損なわれておらず、自らの「巻きこまれ体験」を自覚し、ときに楽しんでさえいることである。そしてさらに、非患者の芸術家群は往々にして「変わったこと」を話しているのであるが、それでも検査者と被検者との間の「コミュニケーション」が成立しているのである。表面的に（つまり、ロールシャッハ・テストの指標としては）自我の統合は崩れているのである。しかし、形態水準指標などによって表現される崩れが数値的には同じのものであっても、事例の表現方法をより詳細に観察するPRIPROには、両者の差がはっきりと表れている。

芸術家としての活動を展開している事例 I は、事例 F や事例 G と同じ「芸術家」であるにもかかわらず低いARS得点にとどまり、かつ精神科に受診するに至る精神的な問題を抱えていた。この事例をPRIPRO や継起分析から見た場合、ロールシャッハ・テスト場面において一次過程を多用している点は非患者の芸術家と全く同じであったが、それを表現する情緒の自由さや率直さに欠けていたこと、また、検査者と被検者とのコミュニケーションに、どこか不自然なところや通じなさが生じていたことに違いが見られている。その意味で、ロールシャッハ・テスト場面への巻きこまれ方に、先の事例 F 事例 G は異なる「何か」があるということになるだろうか。

また、巻きこまれ体験という観点を、何者／物かに「動かされる感じ」や図版との関わ

りの親密さと考えると、前者は非生物運動の「m」と、後者は濃淡反応の各種指標（C, T, V, Y）との関連の強さを考えることが可能である。一次過程の点から「適度な巻きこまれ」を体験していたと考えられる事例 F と事例 G に共通しているのは、「m の多さ」と「濃淡刺激への敏感さ」である。これに対して、巻きこまれに対する慎重さや不自然さが目立った事例 H と事例 I はこれらの反応決定因に乏しく、巻きこまれ過多であると考えられた事例 J は、m 反応の数としては事例 F や事例 G と同じであるものの、濃淡反応については陰性情動の反映といわれる C のみが多く、その他の感受性や敏感さの指標と言われる T などの決定因は皆無であった。これらの記号と PRIPRO についても、本論文第 6 章でその関連性が指摘されるところであったが、一次過程やそれに対する巻きこまれ体験との観点から個々の事例について見た場合もこの傾向を確認することはできている。

ただし、こうした巻きこまれ体験の相違を論じる際に、検査状況の違いを考慮することは不可欠である。事例 F、事例 G、事例 H はともに非臨床群である。すなわち、これらの事例は、検査の施行に際して検査者である筆者が個別に依頼して検査を行ったものである。したがって、各個人には検査を「受けなければならない必然性」もなければ、「検査がもたらす結果に対する不安や恐れ」の度合いが臨床群のそれに比べると遥かに小さいことは言うまでもない。対して臨床場面での検査の一環として実施した事例 I と事例 J は自らの精神的問題を解決すべく相談機関を訪れた者であり、検査結果がその後の治療に及ぼす影響の大きさについて、大なり小なり不安と危惧の念を胸に検査に望んでいるはずである。その意味では、検査場面に対する「巻きこまれ」に相違が生じることは、ある意味では自然なことであるといえるのかもしれない。しかし、その前提条件を考慮に入れた上でも、同じ非患者である事例 F、G、H のそれぞれがもつ問題点とそれに対応する自我の働き方は三者三様である。また、巻きこまれに対する構えについて見ても、非患者であれば一切の不安を感じず、臨床群であれば無条件に不安に苛まれると言うわけでもないことは、比較的固い防衛を張り巡らせていた非患者の事例 H と、一次過程に偏りがちであった臨床群の事例 I とを比べてみても明らかである。検査状況の差異は十分念頭に入れた上であれば、決して比較考察が不可能であるというわけではないと筆者は考えている。

## 結 語

ロールシャッハ・テストによる構造分析がその事例の骨子を把握し、継起分析がその骨子を肉づけするものであると考えるならば、Holt の PRIPRO はちょうどその中間点に位置すると考えられよう。この尺度の考え方そのものが、精神分析的継起分析のものと重なる部分が多いことも大きな特徴である。継起分析が心理臨床の「アート」であるとするならば、その「アート」の質はそのままに残して、整理された形で提示しうるのがこの Holt の尺度である。PPR%の提供する情報は、ある側面では包括的システムにおける WSum6 に類似している。しかし、WSum6 が主眼としている論理の歪みだけでなく、より広範な一次過程を網羅している点に、この PPR%の指標としての利点がある。さらに、ARS という、反応の「一次過程」「形態水準」「防衛機制」の総体を一つで表す指標については、包括的システムでは存在していない。これをプロトコル全体で算出した場合には群比較といった研究上の重要なツールにもなるだろうし、個々の反応ごとに検討する場合には、継起分析を補強する情報源を提供することが可能である。

本論文で報告された実験研究や事例検討から浮かび上がる PRIPRO が測定する心理特性は、主として精神的な何らかの弱さや偏りの存在とそれに対する自我の防衛機能の総体である。単なる「適応の指標」でないことは、尺度の基本としている一次過程が病理との結びつきを強くもっていることから明らかである。しかしそれでも、特に ARS によって測られているのは、ある種の「適応」であり、適応への「試み」である。様々な心理的葛藤や弱さがロールシャッハ・テスト上という媒体によって露呈されてしまうが、これに対する自我の防衛と適応の試みをすくい上げているのが、ARS によって捉えられている自我の営みである。そしてこの微妙な「適応の増加減」が、創造的能力に繋がっているようである。

したがって、ARS で高得点をとる被検者が、決して精神的に「何らの問題もない」ことを意味しているわけではない。しかし、精神的問題の類を緩和する能力と、実際に何らかの緩和されている問題の存在を示唆してくれるものではあるかもしれない。それは、間違いなく自我の弾力性と呼べるものである。そして、この弾力性を発揮するためには、どこかで一度「落ち込む」必要があるのだと言える。つまり、状況に応じて防衛の「成功」と「失敗」があるということになるだろう。自我機能が不全になってしまうこともある一方で、知覚の失敗を体験しながらもそのままの状態が終わらない自我の営みもあるということであろう。そしてこれらの営みが、どこか楽しみながら、「遊び」のような雰囲気をもってなされていることも大きな強みである。ARS の得点の高い者に強い情動体験を体験しがちであるという本論文からの知見は、こうした様々な揺れ動きを体験するものにとって、ある意味で自然なことであるように筆者には感じられている。ロールシャッハ・テストにおける一次過程を読み込んでいくことは、その被検者の体験している「揺れ動き」を追体験する近道であると言えるのではないだろうか。そして、Holt の(1977)の作成した一次過程表象尺度は、この揺れ動きを凝縮して検査者(テストの解釈者)の前に提示してくれるようである。

## 引用文献

- Arieti, S. (1976) *Creativity: The magic synthesis*. New York: Basic Books. [加藤正明・清水博之共訳 (1980) 創造力—原初からの統合—. 新曜社.]
- Blatt, S. J. Allison, J., Feirstein, A. (1969) The capacity to cope with cognitive complexities. *Journal of Personality*, 37, 269-288.
- Dudek, S. Z. (1984) The architect as a person: A Rorschach image. *Journal of Personality Assessment*, 48, 597-605.
- Dudek, S. Z. & Chamberland-Bouhadana, G. (1982) Primary process in creative persons. *Journal of Personality Assessment*, 46, 239-247.
- Exner, J. E. (1991) *The Rorschach: A comprehensive system: Vol.2. Interpretation (2nd ed.)*. New York: Wiley. [藤岡淳子・中村紀子・佐藤豊・寺村堅志訳(1994) エクスナー法 ロールシャッハ解釈の基礎. 岩崎学術出版社.]
- Exner, J. E. (1993) *The Rorschach: A comprehensive system: Vol.1. Basic foundations (3rd ed.)*. New York: Wiley.
- Gacono, C. B. & Meloy, J. R. (1994) The Rorschach assessment of aggressive and psychopathic personalities (SPA Monographs). Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- Holt, R. R. (1954) Implications of some contemporary personality theories for Rorschach rationale. In B. Klopfer, M. D. Ainsworth, W. G. Klopfer, and R. R. Holt, *Developments in the Rorschach technique. I. Technique and theory* (pp.501-560). Yonkers-on-Hudson, NY: World Book.
- Holt, R. R. (1967) The development of primary process: A structural view. In R. R. Holt (Ed.), *Motivation and thought* (pp.344-384). New York: International Universities Press.
- Holt, R. R. (1977) A method for assessing primary process manifestations and their control in Rorschach responses. In M. A. Rickers-Ovsiankina (Ed.), *Rorschach psychology. 2nd ed* (pp.375-420). New York : Klieger.
- Kris, E. (1952) *Psychoanalytic Explorations in Art*. New York: International Universities Press. [馬場禮子訳 (1976) 芸術の精神分析的研究. 岩崎学術出版社.]
- Kleiger, J. H. (1999) *Disordered thinking and the Rorschach: Theory, research, and differential diagnosis*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press.
- Kubie, L. S. (1958) Neurotic distortion of the creative process. Kansas: University of Kansas Press. [土居健郎訳 (1968) 神経症と創造性. みすず書房.]
- Larsen, R. J., Diener, E., and Emmons, R. A. (1986) Affect intensity and reactions to daily life events. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 803-814.
- Lerner, P. M. & Lewandowski, A. J. (1975) The measurement of primary process



- manifestations, A review. In P. M. Lerner (Ed.), *Handbook of Rorschach scales* (pp.181-214). New York: International Universities Press.
- Meloy, J. R., Acklin, M. W., Gacono, C. B., Murray, J. F., and Peterson, C. A. (1997), *Contemporary Rorschach Interpretation*. Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- Murray, H. A. (1951) Forward. In H. H. Anderson & G. L. Anderson (Eds.), *An introduction to projective techniques* (pp.541-580). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Noy, P. (1969) A revision of the psychoanalytic theory of the primary process. *International Journal of Psychoanalysis*, 55, 155-178.
- Rapaport, D. (1951) *Organization and pathology of thought*. New York: Columbia University Press.
- Russ, S. W. (1982) Sex differences in primary process thinking and flexibility in problem solving in children. *Journal of Personality Assessment*, 45, 569-577.
- Russ, S. W. (1988a) The role of primary process thinking in child development. In H. D. Lerner & P. M. Lerner (Eds.), *Primitive mental states and the Rorschach* (pp.601-618). Madison, CT: International Universities Press.
- Russ, S. W. (1988b) Primary process thinking on the Rorschach, divergent thinking, and coping in children. *Journal of Personality Assessment*, 52, 539-548.
- Russ, S. W. & Grossman-McKee, A. (1990) Affective expression in children's fantasy play, primary process thinking on the Rorschach, and divergent thinking. *Journal of Personality Assessment*, 54, 756-771.
- Smith, B. J. (1994) Object relations theory and the integration of empirical and psychoanalytic approaches to Rorschach interpretation. *Rorschachiana: Yearbook of the International Rorschach Society*, 19, 61-77.
- Weiner, I. B. (1986) Assessing children and adolescents with the Rorschach. In H. M. Knoff (Ed.), *The assessment of child and adolescent personality* (pp.141-171). New York: The Guilford Press.
- Winnicott, D. W. (1971) *Playing and reality*. New York: Basic Books. [橋本雅雄訳 (1979) 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版.]